

原爆に身をさらして

【正力】 黒川 泰幸

当時私は広島市鉄砲町に住んでいた。戦争が苛烈になるに従って早晚広島も爆撃されるのは必至のこととて、疎開が急がれていた。私の家にも疎開することになり、妻は子供二人をつれて郷里の正力に帰えり、私は仕事の関係もあり、それに広島市には二人の子供が残っているので隔日のごとく正力と広島市の自宅の間を往来していた。

ところが一生忘れることの出来ないあの運命の日昭和20年8月6日の朝、私は広島市へ帰えろうと支度をしていると、友人の岡山正雄氏が来て、「黒川君、今日広島市へ帰るのであつたら、一緒につれて行ってくれないか」と頼んだので、勿論私は快諾し、道づれの出来たのを喜びながら二人は六時頃家を出て八本松駅に急いだ。その日は雲一つない上天気で朝から暑くなりそうな気配のする日であった。

八本松駅発7時10分に乗車、広島駅についたのは8時を少し廻っていたらうか。二人は改札口を出て広島駅前で電車を待っていた。このとき上空に飛行機の爆音を聴いたが、そのとき空襲解除がされていたので気にもとめずにいた。ところがその瞬間猛烈な焼けつくような光線と爆風を真正面から浴び、私はそれに押されるごとく無意識に駅の中にとびこんだ。しかしその駅の建物も爆風のためにたおれ、私はその下敷になった。しかし、それは後になってわかったので駅にとびこむと同時に私は気を失ってしまっていた。

広島駅の建物の前の方は木造であったのである。これによって私は命びろいをした事になった。何十分、いや何時間たつたろうか。私は正気に帰えつたが下敷になっているので体の自由がきかず全身に痛みを覚えた。助けを求める声が四方八方から聴える。これは大変なことになったと思いながら真黒い四方を見廻すと、一か所空が見える程の穴を見つけた。私は痛む体を必死に動かしながらその穴の見える方へ移動して行った。

ようやくにしてその穴からはい出して屋根に出た。そしてその時眼に映じたのは何であったろう。さっきみた広島駅前の姿はそこになく無惨に倒壊した家の連続と声をかぎりに叫ぶ助けを求める声であった。

私は痛む体をひきずって友人岡山君をさがしたが、岡山君の姿はどこにもみあたらなかった。或は生きていて他に避難したのであろうかと思いながら、それをわずかのなぐさめとして私もどこか安全なところへ移って体をやすめたかった。一度に疲労感がおそって来た。

東練兵場を目指して来てみると、四方に大火災がおきていたが誰一人として消火に務めるものもないようであった。私は鉄砲町の自宅のことや子供のこと

が心配でならなかつたが、どうすることも出来なかつた。逼うようにして尾長小学校に行きここで仮治療をして貰い、汽車に乗るため向洋駅に出ようとして府中方面へ足をむけた。が、それこそ難行苦行で心であせつても足は少しも進まなかつた。

途中で、子供が二部隊に入隊しているのに面会に来たがこの変事で会わずに帰えるところだと言う上品な婦人と道づれになつたが、その人が親切に色々と介抱してくれともすれば倒れようとする体を支えて海田市駅まで運んでくれた。この親切は今もって忘れないが、残念なことにはそのお名前を苦しさの余りとは言え聴きのがしたことである。今もって心残りのすることであった。

尾長小学校から海田市駅まで実に八時間の時間を要して出て来た。ここでも原爆の負傷者でごつたがえしていた。海田市駅で折返えしする汽車にのつたが、八本松駅ではどうしても降りることが出来なかつたので他の人の力をかけて引ずり降して貰つた。

豊栄行のバスにのり正力の家の前で特別下車をさして貰つて降りたときは、心配して集つて下つていた隣、近所、親類の人達は私の顔をみて安心し、また負傷のひどいのに驚いていた。

自宅に帰つてからは氣のゆるみの出たためか、日増に容態も悪くなり、一時は危篤状態になつたが、その後神仏の加護により次第に快癒に向い、どうやら起られるようになった。今もって原爆症に悩まされながら生きながらえているが、あの悪夢に似た一瞬はかたとけたりとも忘れることは出来ない。あの日一緒に出た岡山氏は遂に行方知れずのまま死亡が確認され、さらに正力でも木村英夫、木村益子の両氏が犠牲になられ、他にも多くの被爆者があつた。この人達には心から冥福を祈ると共に、あののろうべき原爆を永久にこの世界からなくするためそして平和な共存の日が続くよう祈つてやまない。

原爆回顧 一焦土にわが子を求めて一

【飯田】 福原 諭

忘れもしない昭和20年8月6日、この日も朝から暑さも厳しいような日であった。空襲警報解除中なのに、8時15分頃ピカーンと青白い強烈な閃光に驚いた。ふり仰ぐ西の空高く銀色に輝く四発の敵飛行機が、一機また一機急旋回している。何か落下傘ようなものが一つ二つ落ちていたように思う、やがて地軸をゆるがすような大音響がドドーンとひびき虹のような、赤、青、茶褐色を帯びた巨大な雲が雲の住のように立ち上ると見るまにどんどん葺状にひろがって、白と黒煙との物凄い有様となった。

あまりの奇怪さに家族一同と呆然とみまもり乍ら「広島のガスタンクの爆発ぢやろー」「いや火薬庫の爆発だろう」さては「向洋の製鋼所が爆破されたらしい」と、とりどりの推測に不安はつのるばかりであった。

当時太平洋戦争末期の戦局は日に日に苛烈を極め、さきに沖縄全員玉碎の悲報をきき、又、主要都市の空襲は昼夜を分たず本土決戦一億火の玉となって総力をあげ、死力を尽していた当時であり、死を鴻毛の軽きに比すとは、文字通りわれわれの合言葉であった。

わが川上村でも凡そ銃をとりうるほどのものは皆、戦線に出で征き残された老人や、婦人、年少者だけが、滅死奉公はこの秋とばかり食糧増産に勤労奉仕に励んでいたものである。わが家でも18才になる正昭は県庁に勤務、空襲下にも昼夜兼行、今夜も宿直、また明日も宿直と、殆んど家へ帰らないで努力も続けていたが、たまたま帰っていたその朝は7日、8日と休暇がでたからといって「お母さん、休みをもらったから田の草は僕がりますよ」と、うれしそうに顔を輝やかせて母をいたわり元気よく家を出たのであった。これが我が子の健やかな姿を見る最後となろうとは、神ならぬ身の知るよしもなかったのである。

やっと広島に新型爆弾が投下され、全市が壊滅的打撃をうけたとわかったのは正午頃であった。知れぬ不安のうちに家内は厚子を背負って八本松駅で夕方まで待っていた。しかし、ついに帰らない。私は公務で西条に出勤し、西条町の救援トラックに乗って、海田市まで急行しすぐ郵便局で自転車を借りはやる心をおさえて、わが子を求めて広島に向った。西蟹屋町を通るところから強烈な爆風で満足な建物は殆んどなく、次第に街は全くの焼の原と化し、コンクリートの建物の原型だけが残っていた。焦土の街をぼろきれのようにちぎれたわずかな衣服をつけて放心したようにそうそうと続く被爆者の群、目も鼻も耳も顔もずるずるととけ、肌の筋肉をぶらんとぶらさげたままわが子を、わが親を呼び求める人々の群、息絶え絶えに「死んでもよいから水をくれ、水」と手を

合せて訴えている。水筒の水を与えると呑みほしたまま目の前で息をひきとる者もある有様だ。

私は一ヵ所また一ヵ所と全部の収容所を探したが、正昭らしい者はいない。戸坂小学校収容所かも知れぬと饒津裏に出た。するとどうであろう、いつも清い流れの太田川にふくれ上った死体が列をなして、ばかりと浮上って流れている。物凄い数だ。次々とひっきりなしに流れて果もない。火の熱さに耐えかねて、わきたぎるような水にとび込み押し合いへし合いながらそのまま死んだのか、或は生命からがら避難しながらやっとたどりついたこの水の流れに、やけただれたのどをうるおすもなく事きたものか …。

戸坂の収容所は、巻脚袢に軍靴をはいた兵隊ばかりであった。教室も廊下もそうして続々運ばれてくる負傷者で一杯だ。照りつけられる運動場のわずかに残る緑のかげが、死にゆく者への最後のいこいの場所なのだが、とても駄目と思われる者はどんどん又タンカで運び出されている。私はようやくたどりついた戸坂収容所にも探し求める正昭がいないのを知って朝からの疲労と失望でがつかりしてしまった。

最後の力をふりしぶって字品方面に向ったのである。鯛尾島収容所にいる子が判ったので鯛尾島行の舟にのり込んだが、親の身にとって何とその舟足のおそかつたことか。

ころがるようにして入った収容所で、兵隊さんに案内され大広間に這入った。いた!! いた!! 正昭だ。「正昭!! しっかりせい、お父さんだぞ」とこみ上げる涙のうちにしっかりとわが子の手を握ったのである。

私の手を握りかえすと「お父さん、心配かけてすみませんでした。どうか許して下さい」と何度もいって手を合せた。何といういじらしさであろう。私は「すまんどころか、生きていてくれてうれしかった。ほんとうにこんなうれしいことは、お父さんも生れて初めてだよ。からだはどんなか、気分はどうだ?」と涙ながらにともに生存をよろこんだのである。

「お母さんも心配していられるでしょう。明朝帰ってもよいと言われるので一緒に帰ります」正昭の言葉に、その夜は、正昭のそばで泊ることとした。9日朝、この日も雲一つない炎天下を舟から自転車に移し、長い長い道を向洋駅までたどりついたのである。

然し当時の汽車はどの列車も貨車も避難者が、満員で鈴なりにぶらさがっている。一刻も早く我が家へつれて帰えりたいと思ってもどうしても乗れないのである。5時頃ようやく乗車して八本松まで帰った。駅前近藤四郎さん宅で小憩し、水を飲んで我が家に帰えったのは6時半頃であった。

家には沢山の見舞の人々が待っていて下さった。正昭はお礼を言いながら当時の模様を聞かるままに次々と話していたが、やがて「お父さん、苦しいから

休ませて、あすまたゆっくり話すから」と、かけつけて下さった高橋先生に診て貰って床についた。

翌朝、広島療養所の内科部長さんにも診てもらったが、小首をかしげるだけで何にも仰言らず、その後日一日と容体は悪化するばかりであった。今考えてみれば医療の手段もなかつた急性の原爆症である。苦痛は烈しく熱は高く顔に汗をにじませて息苦しそうである。そうして時々には、口から出血さえする。カンブルもリングルも一向反応がない。そのうち家内が頭や額の汗を拭くと、頭の髪がごっそりと脱毛するようになった。頭の傷口からは硝子の破片が出た。

14日の朝、正昭は何と思ったか「お母さん、数珠を待って来て下さい」という。数珠を与えると手を合せ、「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と声は低いが、はつきりと念佛を唱えていた。幼な頃日曜学校時代が偲ばれるのであろうか、みとりの者の涙をさそう可れんな姿であった。妙徳寺住職さんも来られてねんどろなお話しがあった。ついに主治医も「残念なことですが、もはや助かりますまい」と小声で言われた。

15日の朝、かぼかぼと口から天井までとび散る程、多量に血をふき出し、口にあてたタオルがたちまち真赤に染りしぶりとする程になった。なお出血は止らないが意識は確かであった。「正昭よ覚悟はよいか」という私に正昭は合掌しながら「黎三よ、後のことばよく頼む」と弟にねんごろに後事を話し「心配するなあとは引受けた」という言葉に安心して、晴々とした顔で先生有難うございました。近所の皆さんいろいろ心配をかけしてすみませんでした。有難うございました。県庁の皆さんにどうかよろしく。僕のところには、沢山のお迎えが来ていられるので僕はそこへお先きにまいります。みなさん後からいらっしゃい」と先生や近所の人々、父母兄弟友達など枕もとにつめかけて、みまもる人々の名を一人一人呼んで、私と家内の手をしっかりと握りながら、18才を一期に、16日午前9時30分最後の息をひきとったのである。わが子ながら健気な立派な臨終であった。

お隣の森玉吉さんが、正昭に泣きながら文字通り慟哭されたことも忘がたい思い出である。

あれから十五年、今は再びかえってこない正昭となつたが、わが子を思う切なさは今も果しない。死児のよわいを数えるのは世の親の常であり、ことごとに生きていてくれさえすればと罪なくして散つたあの子の笑顔を思わずにはいられない。夢にまで忘られないわが子である。

しかし、なつかしいわが家に帰つてしまふ親切なお医者二人、その当時としては出来るだけの手当をうけ家族や親戚、近所の人、親しい人たちにみとられながら、畳の上で立派な往生をとげた正昭は、まだまだ偉せ者である。

未だに一片の骨も残すことなく誰ひとり今もみとられずあの無惨な灼熱地獄の中で二十数万の生靈が、阿鼻叫喚して犠牲になったのである。そして又、ひとり原爆のみならず無暴な戦いのそのために嘆き悲しみ憤りのうちにわが子、わが父、わが夫、わが兄弟を失った人々は幾百万人にも及ぶのである。

この悲しみは私共一家だけではなく、考えて見れば、これ、衆生の苦しみである。今はただ一瞬のうちに有史以来の悲痛な惨害となった巨大な原子のエネルギーが、どうか後に残された遺族われわれの涙と誓いによって浄化され世界永遠の平和のためになるように念じてやまないものである。

後世、再び原爆の惨苛が、地上の何処にもくり返されることのないよう深い祈りをこめ、つたないペンをとってここに村史の記録にとどめておくものである。